

JSNPの50年とともに





Part I

回顧と展望

【JSNP の 50 年とともに】

学会員から寄せていただいたメッセージ (所属, 敬称略, 50 音順)

Part I 回顧と展望

23	吾郷由希夫	We make the Future	…	102
24	浅見隆康	群馬大学医学部行動分析学教室、田所作太郎先生の思い出	…	104
25	一谷幸男	岩原信九郎先生、岩崎先生の思い出 ～東京教育大学から筑波大学へ	…	106
26	糸川昌成	心と脳を行きつ戻りつ～融道男先生の思い出	…	108
27	小野寺憲治	神経行動薬理若手研究者の集いの歩みについて	…	110
28	貝谷久宣	私の CINP 参加記	…	112
29	笠井慎也	海外で開催した第 46 回年会の運営に携わって	…	114
30	高田孝二	精神薬理談話会の頃	…	116
31	新田淳美	研究者として成長させていただいた日本神経精神薬理学会	…	118
32	油井邦雄	CINP シンポジウムの採択の要綱、開催の打診	…	120
33	吉村玲児	わたくしの精神神経薬理学の軌跡	…	122

We make the Future

吾郷 由希夫

広島大学 大学院医系科学研究科 細胞分子薬理学



この度、50周年記念事業ワーキンググループ(WG)の一員として参画し、日本神経精神薬理学会の未来への志向に関して、多くの先生方とお話・議論する機会を頂きました。若輩で甚だ僭越に存じますが、WGの一員として、本記念誌に私の学会に対する想いを述べさせて頂きました。乱筆乱文のほどを何卒ご容赦願います。

私が当学会の年會に初めて参加したのは、当時博士後期課程1年の2003年、奈良県文化會館にて開催されました第33回日本神経精神薬理学会年會(中嶋敏勝會長)であります。薬学部出身の基礎研究者である私は、精神疾患に関連する多くの臨床の先生方、研究者の皆様が参加されておられる専門の学会での初めての口頭発表で、極度に緊張したことを今も覚えています。発表は、抗精神病薬と抗うつ薬の併用による増強療法における脳内神経伝達物質遊離の変化について、ラットを用いて検討を行ったものでしたが、「臨床においては、治療抵抗性患者様に対して、増強療法は選択肢の一つではあるかもしれないけれど、まずは単剤で(数種類)しっかりと治療効果の有無を確かめていくことが大事である。」とのご指摘を受け、データとは直接関係のない?質問に頭が真っ白になりつつも、薬学のテキスト上で学ぶだけでは、実際の医療現場での治療法や問題点は、よく分からないと感じた瞬間でした。大学で、薬物治療学について授業を行っても、種類・分類・作用機序は話せるけども、その選択方法、使い分けの詳細は説明できない。日々勉強であります。学会のブースなどでみられる精神疾患に関するバーチャルリアリティ(疑似体験)は非常に貴重であり、また精神疾患を題材にした映画などもあり、講義でも紹介することが多い。

現在も基礎研究を続けるなかで、臨床の先生方と一緒にする機会がありますが、まだまだ分からないことだらけです。①臨床現場で何が問題となっているか、②医療現場でのニーズ・困っていることは何か、③疾患動物モデルの妥当性や確度はどの程度か、④トランスレーショナル研究をどのようにして進めるか(基礎研究成果の意義の検証)、⑤薬剤や治療法の使い分け法や選択の基準、それらのリバーストランスレーショナル・リサーチは何か、など、基礎研究者として知りたいことや疑問・議題は尽きません。日本神経精神薬理学会年會や、国内外の他学会との合同年會では、最新の研究成果・技術は勿論ですが、基礎研究、テキストレベルでは分からない医療現場の実際と臨床研究、臨床試験、新規薬の詳細なプロフィールを知り、理解し、認識する大きなチャンスであります。一方、薬学領域では、モノ(化

合物)をベースに、薬理学だけではなく、化学・薬物動態学の視点からのヒントも多くあります。近年の大きな話題であるケタミンの立体異性体や代謝物についての薬理作用の違いは非常に興味深く、またリスペリドンの主活性代謝物であるパリペリドンは抗精神病作用を有し、早くから治療薬として開発されています。アリピプラゾールやクロザピンも、親化合物と合わせて、活性代謝物が薬効・副作用に重要な役割を果たしていることが報告されており、キラル化学やバイオアナリシスの観点からの精神疾患創薬というものも、改めて注目されると思っています。

今回、「現在から未来について本学会が行うべきこと、期待についてのアンケート」調査を実施させて頂き、会員の皆様からの率直な意見を頂きました。回答を頂いた範囲ではありますが、当学会会員の職種・分野の属性では、基礎と臨床が同程度であり、アカデミアポジションの先生方が多いものの、その3分の1程度の人数で企業の方も参画されています。このような構成は、基礎・臨床の融合や産官学連携による創薬研究の推進などに向けて、当学会の大きな強みであり、その特徴を大きく表していると感じます。近年の技術革新、大規模ゲノム研究などの進展はあるものの、いまだ精神・神経疾患の克服には発症・病態メカニズムの解明、治療技術・診断技術・バイオマーカーの開発と早期発見、妥当性の高いモデル動物の開発、リソース・データ整備とその活用方法など、多くの課題が残されています。診断は必要であるけれど、創薬になかなかつながっていない。基礎領域では大きな技術革新はあるものの、神経科学とは違い、精神薬理としての領域の役割は何か。企業のニーズも考える。どうやれば創薬開発が進むか、アカデミアとしてどう連携するか。時間軸が違うという課題。基礎・臨床、アカデミア・企業とで違う。全体像を示したうえで、それぞれどうアプローチできるか。ドラッグリポジショニング、基盤データとして構築していく方向性などの考察。臨床あるいは企業からの課題を基礎に結びつけるためのシステムを、学会として提案・構築する機会と想います。課題募集(エビデンスがない、あるいは必要となるものを臨床の先生から提起して頂く、マッチング、ブースを出すなど)や、各会員の専門領域や得意とする技術・保有するモデルの登録・検索、それぞれの得意分野を生かしワーキンググループを作り成果を出す、など、学会 web サイトも利用し構築することは良案でしょうか。会員の皆様のご意見、ご提案をもとに、随時アンケートやソーシャルメディアなども活用しながら、オープン・コミュニケーションと合わせて、新たなチャレンジに結び付けられればと思っています。

当学会の発展は、基礎・臨床の融合強化、産官学民の連携推進を基盤として、精神疾患研究のブレークスルーに直結するだけではなく、それを社会に広く発信し、共有できるものと期待します。また、未来を担う人材の育成・交流の場として、幅広い年代と分野の方が参画し、支援できる学会でありたいと思います。

群馬大学医学部行動分析学教室、田所作太郎先生の思い出

浅見 隆康

群馬大学健康支援総合センター昭和事業場産業医



私事で恐縮であるが、「土曜学校」(精神障害者家族教室の呼称、1996年から実施)での経験は、家族が変わると本人が変わる、本人が変わるので家族もさらに変わる、ということである。行動は自分を変え、周囲を変える(バンデュラ)と言われるが、土曜学校を利用する家族は、行動を変えるヒントをつかみ、そして実践することで、子どもの様子が変わっていくのだと思う。コミュニケーション行動一つにとっても、私たちの日常の暮らしの中で、行動は重要な働きを担っているが、田所作太郎先生(以後、先生と略す)は、行動という現象を視点に、臨床と基礎の橋渡しに学究生活の大半を割かれたと思う。群馬大学医学部五十年史(1993年)には、「行動は単なる運動ではなく、広く中枢機能を反映した全身的な動きであり、正常な行動は環境と見事に調和している。」と述べている。

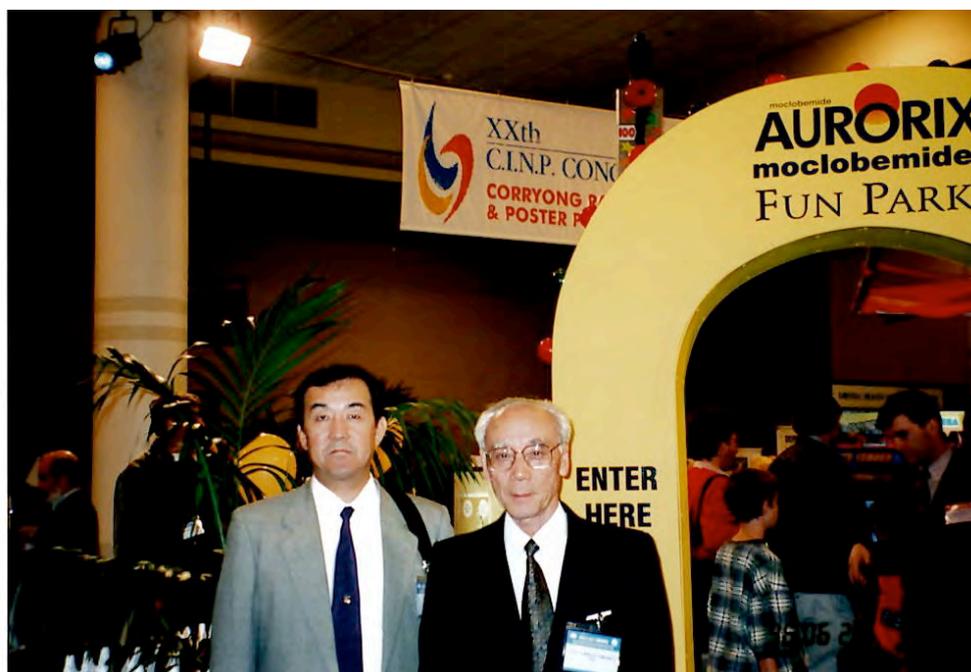
群馬大学医学部附属行動医学研究施設行動分析学部門(現在は神経薬理学講座に改組)は1972年11月に開設され、先生は部門の教授として重責を果たし、1992年3月に定年退官を迎えた。私が行動分析学教室に出入りさせていただくようになったのは1984年のことで、当時大学から離れ、足利富士見台病院(現院長 根岸協一郎先生)の精神科常勤医として働いていたが、根岸達夫院長(故人)から、「浅見先生、臨床ももちろんだけど、研究も大事だよ。」と何度もお話しいただき、町山幸輝教授(故人)のご助力を得て、先生にお世話になることになった。教室には、小川治克先生、栗原久先生、林哲先生が在籍されていたが、私は栗原先生より研究の手ほどきを受けることになった。学生時代の薬理学実習で、マウスの“ちょこまか”行動を測定する器械を見せていただいたが、実験部屋には何十台も設置され、少量のメタンフェタミン皮下投与により、アンビュロメーターが一斉にカチャカチャ音を鳴り立てる様子に、改めて覚せい剤の薬理作用を思い知らされた。ある時、1匹のマウスが全く反応せず、先生の助言を受け、覚せい剤をもう一度投与すると元気に動き出す、といった出来事があった。先生は笑顔で、「浅見君、薬には作用があるということだよ。」と話された。私がうっかりミスをしていたことを不問に付してくださった。学会のデビューは、第15回(1985年9月、京都市で開催)の時で、この発表のことはよく覚えている。それは住まいの伊勢崎市から日帰りで学会参加したこともあるが、勤務先の病院で、精神病症状を伴う月経前緊張症候群の事例を経験し、ブロモクリプチンに治療効果を認め、その薬理作用を検討し研究発表に至ったという経緯からである。発表の準備に際し、先生や栗原先生に大変お世話になった。発表が終わって、「浅見君、声が大きくてわかりやすかったよ。」と先生から褒めていただいたが、もう少し違う内容で褒めていただきたかった、と述懐する。

先生は、1970年から1990年にかけて、国立赤城青年の家(現国立赤城青少年交流の場)に

て、赤城合宿を開催した。毎年8月から9月に行われ、全国各地から多くの研究者が集った。精神薬理懇話会の一環として行われ、この懇話会は、後に今現在の神経精神薬理学会に発展した。私は多くの、その当時の若手・中堅研究者に出会った。今回の記念誌の取りまとめ役をなさっておられる廣中直行氏ともここで知り合った。現在、学会の名誉会員、功労会員として名を連ねている先生方とも、親しく言葉を交わすことができた。朝礼で国旗掲揚があり、「君が代」を斉唱し、ラジオ体操を行い、それぞれの担当箇所を掃除して1日が始まり、午前の研修を経て、日中は自由時間となり、再び夕方から研修となり、21時消灯といった、今では考えられないような体験をしたが、改めて先生の行動力に恐れ入る。

先生は、第21回日本神経精神薬理学会(1991年10月30日～11月1日、群馬県民会館)の大会長を務め、1992年3月末日に群馬大学を定年退官し、1993年4月から1999年3月にかけて、群馬県立医療短期大学(現群馬県立県民健康科学大学)学長をなさった。医学部時代も先生は多くの学生に親しまれ、信頼された。引き続き医療人材を育てる場が用意されたことは、ご自身の信じた道を真摯に歩み続けたことによる天意による配置と言っても過言ではない。2002年勲三等旭日中綬章を受勲され、2011年9月25日ご逝去なさった。

私自身は、2018年4月から、福田正人教授からお勧めをいただき、群馬大学の医学部や附属病院がある昭和事業場にて産業医を務めている。26年ぶりの古巣であるが、私にとっては異世界と思えるほど組織再編がなされている。産業医の仕事は職員の健康管理である。健康は規則正しい生活リズムで維持されるが、調和のとれた行動とも捉えることができる。未だに先生から教えていただいた事柄が役立っている。



(第20回国際神経精神薬理学会 メルボルンにて 1996年6月25日撮影)

岩原信九郎先生、岩崎庸男先生の思い出：
東京教育大学から筑波大学へ

一谷 幸男

東京成徳大学・筑波大学



神経精神薬理学会の会員として正式に参加するよりも、はるかに古くから私がお世話になり続けたのが、学会の前身の一つである「精神薬理懇話会」です。この懇話会は、その後私が大学院での研究と、しばらくの間を経て再び筑波大学心理学系での研究を行うにあたって、行動薬理学、薬物を使った実験心理学研究へと向かわせてくれた源といえる。

記憶に定かでないが、おそらく最初にこの会に参加したのは、教育学部3年生の頃。岩崎庸男先生（当時助教授）に誘われて、新宿区の神経研究所・清和病院へ。世話役は加藤信先生であった。もちろん岩原信九郎先生（当時教授）も、一番前の席で盛んに質問されていたが、話題の中味は全く憶えていない。これがその懇話会の抄読会だったと思う。

岩原先生の学部での授業は、当時アイザクソンのテキストの訳本「生理心理学」を名簿順に分担して、受講生が順に内容を説明していくというもの。講義科目といっても、先生自身のいわゆる講義は一切無く、次々と質問がなされて、学生がうまく答えられないと、次回までに国会図書館や医学部の図書館に出かけて調べてくるように、というスタイル。

その後、岩原研究室に入門したが、先生はまもなく体調を崩し入院され、私は岩崎先生の研究室で卒論生として過ごした。それでも入院先の病室に卒論実験の計画書（当時は青焼き複写）を持っていけば、病床で読んでくださったあとの細かいコメントが、鉛筆でびっしり書き込まれて返ってきた。

岩原先生の話のなかでよく出てくる口癖は「莫大な」だった。知覚研究から始まり、動物心理学へ、そして心理推計学の日本への導入、さらには生理・薬理心理学を心理学の中で先導された。日本心理学会、動物心理学会での活躍はもとより、精神薬理懇話会、生理心理学・精神生理学懇話会（現在の生理心理学会）の設立に貢献された。さらにまた、脳波・筋電図学会（現在の臨床神経生理学会）、神経科学協会（現在の神経科学学会）、脳研究会（現在の日本脳科学会）にも深く関わるなど、あまりにも広範な分野で活躍され、将来の心理学、精神医学、精神薬理学、神経科学の展開を見据えた、まさに莫大な知識収集欲や実行力は誰にもまねのできないものであったと痛感する。岩原先生は東京教育大学閉学の直前、研究室に多くの院生を残し、55歳という若さで他界された。私が研究室に出入りするようになってからあっという間のことであり、ほんの少しの間しか先生に接し学ぶことができなかったのは、今でも残念である。

一方、大学院在学当時から製薬企業の研究員として務められた岩崎先生は、カナダへの留学期間も含めて10年間の勤務をされた後、東京教育大学に戻り教鞭を執られることに

なった。当時のふつうの心理学テキストには出てこない薬物を使った行動科学、心理学研究に私たちは魅力を感じた。教育大学の実験室では、マイナーおよびメジャートランキライザーが動物の各種の行動に及ぼす効果の研究を展開し、同時に海馬脳波への影響も解析していた。

大学の移転があり研究の場所が東京・大塚からつくばに移ってからは、行動科学実験、生化学実験の設備を充実させ、テーマも学習・記憶の中枢メカニズムに関する生理心理学的研究、行動異常の動物モデルに関する研究へと発展していった。今でこそ一つの確立された研究領域となった行動薬理学を、岩崎先生が学会のなかで若手リーダーの一人として推進してきたこと、心理学のなかでこの分野を定着させたことは、研究上の大きな功績といえよう。

つくばに移ってからも、精神薬理懇話会の抄読会へ参加していたのはなつかしい。この頃はすでに星薬科大学で鈴木勉先生が世話人となって開催され、最初のうちは常磐線に揺られながら、さらに後には自家用車で分乗して岩崎先生と院生数人がともに出かけていった。研究室で行うミーティングとは異なり、薬理学、製薬学、精神医学等いろいろな立場の研究者、学生が参加していたことはたいへん刺激的であったし、またこの場で私たち多くの院生が発表の機会を与えられて、研究の suggestion を得ながら成長していったことは感謝に絶えない。

東京教育大学・筑波大学を通じて 30 年近くにわたり多くの大学院生、学部生を指導し、人材を育成してきたことは岩崎先生の教育上の大きな功績である。学部生時代から始まって長らく岩崎先生の指導を受けてきた私の印象は、美味しそうにたばこ (Cherry と決まっていた) をくゆらせながら、われわれの得た実験データをじっくりと眺め、深く吟味するスタイルであった。大学院出身者は各地の大学や研究所、製薬企業の研究所等で心理学、医学、薬学分野の教員、研究員として活躍している。

精神薬理懇話会の抄読会がいったん取りやめになったあと、現在の「薬物・精神・行動の会」が廣中直行先生を中心として新たな形で定期開催されることになった。すでに 20 年近く東京都内で継続されている。岩崎研究室門下生も世話人に加わっているが、精神薬理懇話会発足当時の堅苦しくない勉強会の精神を残しつつ、最新のトピックを取り上げてもらっている。行動薬理、精神薬理学の若手研究者にも声をかけていただき、学習の場を与えてくださっていることに感謝している次第である。

心と脳を行きつ戻りつ — 融道男先生の思い出 —

糸川 昌成

東京都医学総合研究所、東京都立松沢病院精神科



私が融先生に初めてお目にかかりましたのは、平成元年（1989年）の秋のことでした。この年の5月に医師国家試験の合格発表があり、高橋良先生が亡くなられたばかりだったので、まだ教授不在の東京医科歯科大学精神科へ入局いたしましたのが6月のことでした。教授回診は、当時助教授だった小見山実先生と講師の小島卓也先生が交代でされていました。夏が終わるころ、同期の研修医から「信州大から融先生が来られるらしい」と聞いて、先生のお名前を初めて知りました。10月末に信州大学から先生のお荷物が届き、私たち研修医たちは引っ越しのお手伝いをいたしました。膨大な英文書籍や論文に混じって、スキー用具とフロイト全集がひとときわ目を引いたことを憶えています。

教授回診では、臨床医学はもちろんですが、生化学、生理学、薬理学に精通されたコメントや質問を次々となさるので、患者さんの状態を精神医学から生物化学まで隔たりなく用いて理解する方法を学びました。この1年余りの回診で学んだことが、わたくしの30年の臨床観に最も強い影響を与えたと考えます。つまり、心と脳を行きつ戻りつしながら臨床を考える習慣でした。

融先生が着任された年の12月のことでした。出版されたばかりの論文を手にとりながら、「誰か統合失調症のドーパミン受容体遺伝子をやらないか」と、医局でおっしゃる先生のお姿を拝見しました。論文はPNASで、オレゴン大学のDavid GrandyたちのD2受容体のクローニングの報告でした。入局したばかりの新人には関係ないことだと思ってその場を離れましたが、この場面こそが私のその後の人生を決定した重要なできごととなったのです。

翌日、融先生から内線電話を研修医室で取ると、「時間があれば教授室へいらっしゃい」と呼ばれました。緊張して教授室へ伺うと、筑波大学の有波忠雄先生のお手紙を私へ見せられました。それは、「ドーパミン受容体遺伝子を統合失調症患者さんのDNAを使って解析する」という融先生のお手紙に対する、有波先生からのお返事でした。「若い戦力と患者さんのDNAがあれば可能である」と書かれてありました。ぼんやり、そのお手紙を眺めていると、「君、筑波へ行かないか」と先生がおっしゃったので驚きました。とても自信がなかったもので、「僕でできるんでしょうか」伺うと、先生は自信たっぷりとにこやかに「できるとだけ答えられました。

それでもなお自信がもてなかった私は、医局長の金野滋先生に御相談しました。すると、「医者になって2年目はとても大切な時期だ。この時期に臨床をはなれると将来精神科医としてやっていくのが難しくなる。短期間でもいいので、みっちり臨床をやったほうが良い」とアドバイスをくださいました。そこで、1年半の医科歯科大での研修が終わると、福島県

の精神科病院で常勤医になりました。月曜から木曜まで病院に勤め、木曜の夕方スーパーひたちで土浦へ移動すると、筑波大学で深夜まで有波先生から実験を教えてくださいました。木曜と金曜は筑波の官舎に泊まり、土曜の夕方実験が終わると、外郭環状道路がまだ開通していなかったため、国道16号線を3時間運転して川越の自宅まで帰りました。当時、医大時代の同級生と結婚したばかりで、妻が埼玉医大に勤務していたので川越に新居を構えていたからです。結婚式の仲人をお願いしに、妻と荻窪の御自宅へ伺った時のことでした。先生が「旦那さんは戦地にとられたか、南極越冬隊に参加していると思ったほうがいい」と言われ、妻が驚いたことを思い出します。

先生の予言どおりのような福島・筑波・川越の大移動を3年続けました。その間に海外の著名な研究者から、ドーパミン受容体遺伝子を解析したけれど、どこにも変異はなかったという論文が3報出ました。そういう論文を見るたびに、自信がなくなりやめようかと悩みました。不思議なことに、先生はそういう時にかぎって筑波へお電話をくださいました。お電話の声は明るく「どうだい、変異があったろう？」と言われました。「みつきりません」とお答えすると「大丈夫だ。君ならみつけるさ」と言って電話は切れました。お電話のあとはなぜか元気が湧いて、再び実験を続けることができたものです。

そして、1993年4月7日のことでした。4月16日付で医科歯科へ医員で戻ることが決まっていたので、この日が筑波最後の実験日になりました。信じられないことに、この日に変異を見つけたのです。暗室で現像液のフィルムに浮かび上がった、見たこともないバンドを何度も見直しました。先生は、論文を二つに分けて、私に変異発見の第一報をBBRCに、有波先生に統合失調症のリスクが3倍上昇する遺伝子多型であるという論文を、ランセットに発表させてくださいました。

医者になって最初の4年半のできごとが、その後の私の25年を決めたように思います。東京都の研究所で生物学の実験をしながら、隣の松沢病院で患者さんを診る。現在の私の姿は、まさに先生が教授回診で示してくださった臨床観の実践に他ならないからです。なぜか自信喪失しているときを分かってらっしゃったかのようにお電話をくださり、明るく自信たっぷりに背中を押していただいたことが何度もありました。そうやって先生が授けてくださった全てを、いま、都立病院や研究所の若い人たちに、先生がしてくださったのと同じ方法でして差し上げています。



毎冬行われた研修医たちとのスキー旅行。1990年冬
(融先生：前列右から二人目。筆者：右から4人目)

神経行動薬理学若手研究者の集い（YNBP の集い）の歩みについて

小野寺 憲治¹、稲津 正人²

¹ 疾病薬学研究所、

² 東京医科大学 医学総合研究所



小野寺が、薬学の大学院に入って研究を始めた頃（70年代）は、中枢神経に関する薬理学的研究の分野では、丸ごと動物を中心とした研究が自由に行えた。主に行動薬理学の分野では小動物のマウス、ラットに薬物を投与したり、脳内（脳室内や脳実質）へ神経伝達物質を投与したり、扁桃核などの部位を電気破壊などして、動物の行動変容を観察するものでした。当然、各種病態動物、例えば学習記憶障害やうつ病の動物モデル作りも盛んに行われていました。動物愛護協会もその当時はうるさくなく、痛みの実験や犬、猫を使って電気生理学的研究も存分にやれた時代がありました。

このような環境下で、1992年（平成4年）3月21日、小野寺らは、志を同じくする仲間と、第1回神経行動薬理学若手研究者の集いを立ち上げました。これは第65回日本薬理学会（仙台）の開催前日に行いました。この時の主旨は、中枢神経系における各種脳内伝達物質（特にヒスタミンを始めとする脳内モノアミン）の機能上の役割を神経化学ならびに行動薬理学的立場より検討することでした。この日は記録的な大雪でありましたが、九州や岡山などから飛行機、電車を乗り継いで参集し、夜遅くまで、議論が尽くされて若手の意気込みを感じさせるものでした。この第1回をきっかけに第2回以降、日本薬理学会年会の前日のサテライトシンポジウムの位置づけで、若手の研究者の発表討論の場として代々と引き継がれており、YNBPの集いとして定着しております。本会の正式名称は神経行動薬理若手研究者の集いと称し、英語名を Young researchers' society of Neurobehavioral Pharmacology (YNBP) としています。

その目的は、神経薬理学の先端的な成果と行動薬理的な手法を結びつけた研究をプロモートし、臨床病態での脳機能異常を脳内伝達物質の動態と相互作用から解明し、生理機構の解明と創薬に役立つ研究の討論の場を提供することです。特に、若手研究者の育成とともに国際化を目指しております。この間に、第5回記念シンポジウム（1996.8.9-10）を第2回行動薬理研究会の合同で、仙台の作並グリーン・グリーンホテルで行い、また、第1回神経行動薬理国際シンポジウム（2003.9.13-15）は、若手研究者とともにという趣旨で、岡山市の国際フォーラムおよび国際会議場にて、アメリカ、ドイツ、オランダ、ロシア、フィンランド、スウェーデン、韓国、台湾などからの研究者が参加して、熱い討論を交わしました。

最近の活動としては、2020年においてYNBPの集いとして、29回を数える開催を維持しており、もうすぐ30周年を迎えようとしております。先人達の理念やビジョンを受け継ぎながらもその時代に応じで進化してきました。すなわち、神経行動薬理全盛期からパラダイムシフトして分子生物学を応用した神経薬理学の先端的な成果と行動薬理的な手法を結びつけた研究へと変容してきました。また近年では、神経薬理学の研究者のみならず、臨床病態での脳機能異常の生理機構の解明と創薬に役立つ研究を行っている生理学研究者の参画も推進し、学問のレベル向上にも繋がっております。

一方、薬物治療を補完する機能性食品などの研究や臨床の観点から各種神経精神疾患の発症原因や症例を解析する調査研究にも注目し、学問の裾野を広げつつあります。今後も、本会は神経行動薬理を基盤として多くの新しい分野との融合を図りながら進化し続けていこうと考えております。

しかし、我々が知る限り、若手の研究を志す諸氏の環境は厳しいものがあり、例えば薬学教育が6年生制度になってから、卒論が簡素化され、臨床実技重視のため、動物実験はあまり行わない現状のようである。それでも、教員育成のための大学院が設置されつつありますが、博士号の取得までには4年間上乘せとなるために、博士課程に入学する学生が激減している。これらの影響により研究パワーの低下が懸念される。このように、若手の研究者を取り巻く環境は悪化し、ポスドク等にとって希望する職が得られにくく、活躍の機会が十分に与えられていないという、需給のミスマッチが生じていると考えられている。

他の学問領域もいい環境にはないようであるが、悲観ばかりしているわけにもいかないので、先人のパワーを感じてもらって、若手研究者の励みになることを祈っております。これまでの神経行動薬理若手研究者の集いの軌跡をホームページに紹介してあります、(<https://ynbp.jimdofree.com>)。

加えて、JSNPは精神薬理懇話会として1971年に発足し、メンバーは基礎研究者と臨床医からなり、基礎と臨床の融合という意識が強かったそうです。近年は、専門領域毎に多くの学会が設立されていますが、JSNPのように基礎と臨床のクロストークがより活発になるように共に歩んで行ければ幸いです。

以上

私の CINP 参加記

貝谷久宣

医療法人和楽会 理事長

CINP への私の参加は一昨年(2017)の第 31 回大会までに 8 回に及ぶ。Max Planck 精神医学研究所(München)で 2 年間(1972-74)の留学を終え 4 年たった私は、精神分裂病の責任部位の一つは線条体であると考えていた(1)。思えば、この考えはノーベル賞学者 Carlson が 1988 年に提出したドパミン修正仮説に約 10 年先立っていた。私は線条体のシナプス顆粒を電顕組織化学的に観察し、神経伝達物質インターアクションが明らかにならないかと考えて仕事をしていた。ウィーンでの第 11 回 CINP(1978)は、再度ドイツ語圏へ行きたいと考えていた当時の私には魅力的であった。プログラム委員会へワークショップ“Psychobiology of Striatum”を提案したら開催許可がおりてしまった。初めての国際学会で organizer & chairperson をすることになり、ドン・キホーテ人間の私だが、さすがに面食らった。恩師難波益之教授に相談すると、即座に Max Planck 脳研究所(Frankfurt am Main)の Hassler 所長とペアーで会議を進めるように指示された。Hassler 教授は Vogt 研究所における恩師の留学仲間であったので、話はスムーズに進んだ。私たちのワークショップは Hassler 教授の老練なリードで難なく終えることができた。この国際会議の開会式前夜祭は今も忘れることができない感動のものであった。正装の大会長夫妻(Prof. Berner?)が会議場となった会場玄関(シェーンブルン宮殿?)で参加者一人ずつに深紅のバラの花を手渡してくれた。宴が始まると間もなく、真っ暗闇の宮殿の庭が一気にライトで照らし出され、芝生の緑が目飛び込んだ。次の瞬間白鳥の湖のメロディーとともに純白のバレリーナが舞い現れた。宴会場に大喝采が起こった。私の人生において、この国際学会への参加は驚喜あふれる感激的一幕となった。



第 11 回ウィーン大会以後、第 13 回エルサレム大会は政変の危険性で避けたのを除き第 18 回大会(1992)まで毎回参加した。第 12 回大会(1980)は Gothenburg で開かれたが、Stockholm の観光で日本からの脳神経外科医と一緒にいたことぐらいしか覚えていない。第 14 回大会(1984) Florence。この会議に連結して開催されたウィーンでの国際内分泌精神医学会をはしごして、三重大学精神科故鳩谷龍三教授とその門下(北山功、井上桂君ら)の旅行団に加わり大変楽しい旅をした。第 15 回大会(1986) San Juan。岐阜大精神科教室員上松正幸君が同行した。南国カリブ海の香り豊かなプエルトリコでサングリアを楽しんだ。第 16 回大会(1988) Munich。この旅には上松夫妻と長女を伴った。マックス・プランク精神医学研究所のゲストハウスに滞在して学会に出席した。学会前、精神分裂病の PGE₁ 欠乏仮説に関する討論にヘルシンキ大学精神科 Dr. Virkkunen を訪問した(2)。それは、当時、

私たちは精神分裂病血小板の PI サイクルの質的異常所見（デアシル・グリセロール蓄積）を得ていたからである(3)。さらにその後、岐阜で P.S.E.(Present State Examination)の指導を受けた Nottingham 大学精神科の Cooper 教授のお宅を訪問した。**第 17 回(1990) Kyoto**。もちろん参加したが、この年は私が大学を辞す 1 年前で、研究生活が最も低調な時期で演題提出はしていない。**第 18 回(1992) Nice**。自衛隊中央病院神経科に転職しており、吉田栄治医局員(後の赤坂クリニック院長)と教授就任間もない山脇成人夫妻との同行だった。その頃、私は香道に入門していたので香水の町グラスを訪問し、南フランスの旅を妻とともにじっくり楽しんだ。

この翌年 1993 年、私は名古屋で開業し、CINP は卒業した。それからは、実施臨床の情報がより多い米国精神医学会(APA)に毎年出席し、ポスター発表をしていた（現在 APA 功労会員）。私は初めからパニック症に的を絞り不安・抑うつを専門とするクリニックをやっていたと決めた(4)。それからは臨床研究がメインになった (5)。パニック症を診ているとパニック発作をはじめとする種々な症状は治すことができても、それに伴って生じる抑うつ状態は慢性治療抵抗性で何とかならないかと悩んだ。そのうちに、パニック性不安うつ病という概念を考え出したが、これは本質的には非定型うつ病だということが分かった。しかしながら、適切な治療薬は見つからない。そのうちに、患者が自ら陳述しない重要な症状 — “不安・抑うつ発作” — に気づいた。この”不安・抑うつ発作”は、一口に言えば、パニック発作のメンタル版であるが、パニック症以外に他の不安症をはじめ多くの障害に transdiagnostic に見られることが明らかになった(6)。現在、私は残る人生は、”不安・抑うつ発作”の臨床研究成果を世の中に伝え、不幸な人生を送る患者を一人でも減らすことに費やしたいと考えている。

第 31 回(2018) CINP が Vienna で開催された。私はこの”不安・抑うつ発作”のポスターをもって 40 年後に第 11 回と同じウィーンで開催される CINP に参加した。精神科医 3 年目の四女もたまたま大学の指導医に命ぜられポスター発表をした。同じ発表日に会場前で娘と撮ったのが冒頭の写真である。

文献

- (1) 精神分裂病と storiopathy. 難波益之・貝谷久宣編、「精神分裂病研究の源流」. 1987、Pp.25-51.ヘスコ・インターナショナル。
- (2) ヘルシンキ大学医学部精神科訪問記. 心の臨床ア・ラ・カルト、1989 (3): 63-67.
- (3) 脂質代謝異常症を示す精神分裂病の一亜型について — “体質性精神分裂病”の提案 — 町山幸輝・樋口輝彦編「精神分裂病はどこまでわかったか」. 1992、Pp. 159-191.星和書店。
- (4) 精神科開業医の生活—1(経営者、研究者として)。月刊『精神科』、2011、19 (4): 1-7。
- (5) パニック障害 塩入俊樹・松永寿人編、「不安障害診療のすべて」. 2013、Pp.121-164. 医学書院。
- (6) Distinctive Clinical Features of “Anxious- Depressive Attack”. Anxiety Disorder Research, 9: 2-16, 2017. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsad/9/1/9_2/_pdf/-char/en

海外で開催した第46回年会の運営に携わって

笠井 慎也

公益財団法人東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクト

この度の50周年記念誌の発刊に際し、日本神経精神薬理学会が創立50周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。



この半世紀におよぶ長い日本神経精神薬理学会の歴史の中でも、年会を海外で開催したのは2016年の第46回年会ただ一回です。私が日本神経精神薬理学会の会員になって10年足らずですが、この貴重な海外開催の機会に年会事務局長を拝命し、その運営に携わることができました。

第46回年会は、池田和隆年会長（東京都医学総合研究所）のもと、2016年7月2日、3日に韓国ソウルのCOEX（江南地区にある展示・会議場）にて開催されました。7月3日、4日に同じ会場で国際神経精神薬理学会の30th CINP World Congressが開催されることが決まっていたので、それに合わせて日本神経精神薬理学会の年会を開催することで、CINPも盛り上げて日本のプレゼンスをアピールしようという考えが、この海外開催に繋がったと聞いています。CINPは1957年に創立され、現理事長のSiegfried Kasper先生まで約30名の先生方が理事長を務めておられます。アジアでは山脇成人先生（広島大学）ただ一人で、この第46回日本神経精神薬理学会年会、30th CINP World Congressの同時開催期間を含む2014年～2016年に理事長を務められました。31st CINP World Congressは2018年にウィーンで開催されましたが、国別参加者は日本が一番多く（開催国のオーストリアよりも多かったそうです）、このソウルにおける同時開催が、精神神経薬理学の分野でも日本のプレゼンスを世界に広めていく良いきっかけになったのではと思います。また、第46回年会の懇親会はJapan Nightと題してCINPの執行役員なども招待しており、海外の関連学会との交流も進められたのではと思います。

第46回年会ですが、海外開催にもかかわらず500名以上の参加があり、50以上のシンポジウムなど口頭発表セッション、150以上のポスター発表が行われました。参加・発表下さった先生方、ありがとうございます。特別講演では、樋口輝彦先生（国立精神・神経医療研究センター）が本邦における向精神薬開発の現状について、John H. Krystal先生（Yale University）がケタミンなど抗うつ薬について講演されました。今回のように国内学会の年会を海外で開催する例は、精神医学や神経薬理学の分野のみならず、自然科学分野全体でも非常に希なことです（過去には例がないと聞いています）。学生や若手の医師・研究者、企

業の研究者に多く参加してもらえるよう、大会長の池田と頭を捻らせました。

本年会では、宮田久嗣先生（東京慈恵会医科大学）に組織委員長、橋本亮太先生（大阪大学、現国立精神・神経医療研究センター）にプログラム委員長をお務めいただき、数多くの先生方に組織委員をお願いしました。基礎研究者・臨床医が所属する本学会ですが、基礎研究者と臨床医の交流はそう多くありません。私は基礎研究者ですが、橋本亮太先生とはメールで頻繁に連絡を取り合い、臨床医の先生方の意見を取り入れるように努めました。本学会の学会活動が、今後、共同研究など基礎研究から臨床開発に至るきっかけになることを期待しています。

実際に運営に当たってくれた AE 企画とは、別の年会運営（鎮痛薬・オピオイドペプチド研究会）でお世話になり、その伝手をお願いすることになりました。日本とは会場運営が異なり、現地運営は手探り状態にもかかわらず、これ程の運営を行ってくれました古澤様、今井様をはじめ AE 企画の皆様感謝しております。

国内学会の年会を海外で開催するという、この第 46 回年会の少し難しい試みが、本学会の取り組みを世界に広めるきっかけになったのであれば、事務局長として年会運営に携わった甲斐があり嬉しく思います。最後に、今後も継続して AsCNP、ECNP、ACNP、CINP など海外の関連学会と連携をはかり、日本神経精神薬理学会が益々発展しますことを祈念いたします。



精神薬理談話会の頃

高田 孝二

帝京大学文学部心理学科（元）

東京慈恵会医科大学精神医学講座



年表にあるように、本学会は1971年の精神薬理談話会の発足に始まる。この談話会の発起人が、精神医学の小林司先生（（財）神経研究所）、薬理学の柳田知司先生（（財）実験動物中央研究所；以下、実中研）、心理学の岩原信九郎先生（東京教育大学）の3名というのが、現在にいたるこの学会のコアなカバー領域を示しているように思える。会員募集の案内は1971年2月付で発送され、これには、この会を立ち上げた理由として、「精神薬理学は、精神医学、薬理学、心理学等、多くの分野の臨界領域として発達してきたために、これを学ぶ人たちにとって「共通の話し合いの場」がないと言われてきました」があげられ、まずは内輪で、「集談会ないし勉強会」を作ることを目指すとしている。第1回集会はこの年3月に行われ、この時、年2回程度の会合と、勉強会（合宿）を持つこと、ニューズレターを刊行すること、月1回、抄読会を開くことなどが決定されている。この年はさらに、向精神薬の評価技術に関する講習会が6月に開かれている¹⁾。その後、三共の上岡利春先生が世話人に加わるなど、製薬業界の先生方も積極的に参加された。ちなみに年会費は500円で、各集会の参加費は100円とある。当時、駅の立ち食いそば屋のためきうどんが70-80円だったように思うので、とにかく、この分野に関わる者たちが「気楽に参加」できることが会の大きな趣旨のひとつであったろうと推察する。

私自身は心理学の出身で、心理学で修士をとり、薬理のヤの字も知らぬまま、1975年に実中研に就職した。当時の上司は、やはり心理学出身の安東潔先生であり、部門長は柳田先生であった。この年は、田所作太郎先生（群馬大学）の主導で第1回目の「赤城合宿」が行われ、私もわけわからぬまま参加し、「知らぬが仏」で斯界の権威に随分生意気な口をきいたものだと、今思い返しても汗がでる。この合宿は何年か「国立赤城青年の家」で夏に開催され、女子高校生とフォークダンスなど、得難い(?)催しもあったが、残念ながら酒はご法度、朝は6時起床、朝食前に国旗掲揚、清掃、点検などがあり（毛布のたたみかたなどチェックされる）、なかなか厳しい生活を強いられた。起床時に流されるペールギュントは、以来、この時の寝室風景と結びついてしまっているが、寝食をともにできたことで気の置けない多くの知己を得たことは得難い収穫であった。新幹線のなかった当時、行き返りの電車（当時は国鉄）で、参加される先生方と語り合ったのも楽しい思い出である。行きにたまたま出会った星薬大の鈴木勉先生と一杯交わしたおり、先生がなぜかおごってください、これ以降、私の中では上下関係が確立してしまった。

いずれにせよ、この会は老若男女を問わず、この分野に関わる者が忌憚なく語り合える稀有の場所を提供していたといえる。さらにこの会は、1974年には、薬物依存研究の第一人

者である米国ミシガン大学のシーバース教授らを招いた薬物依存の国際シンポジウムを主催するなど²⁾、設立当初からエポックメイキングな活動を行っていたことがうかがえる。

1970年代のこの分野のトピックとして、取り上げ方は様々あるが、例えば”addiction”におけるドパミンの役割が強く認識されだしたのがこの時代である³⁾。我が国においては、「動物の行動を指標として薬物効果を探る」というのが非常に新しい時代で、トンプソンとシュスターの Behavioral Pharmacology (1968)⁴⁾が、田所、安東、柳田訳で、岩崎学術出版から上梓されたのが1972年である。一方、新しい指標を使えばそれだけで論文になるというのはいつの時代も同じと思うが、この時代も、それだけの論文（「この薬物ではこの行動がこのように変化しました」）が山のように出版され、作用機序や治療薬の探索の観点などから多くの手法が淘汰された。私自身は、行動の統制に厳密な条件を求める心理学分野と、多少のノイズがあっても迅速な結果（例えば、抗不安効果はありそうか、など）を求める薬学・薬理の分野との相克や、学際分野に踏み込んでしまった自分の立ち位置に悩んだりもしていた。後者については、その後、医学、薬学、心理学、その他、それぞれの分野で基礎教育を受けた者は、やはりそれぞれに物の見方やアプローチが異なることを実感し、安堵した記憶がある。

なお、設立当初より継続されていた抄読会は、「世話係」の加藤信先生が実中研に移られた翌年の1978年より、鈴木先生に引き継がれた。その後、学会の発展とともに消滅したが、このような機会をなくすのは惜しいと、慈恵医大の宮田久嗣先生が場所を提供くださり、メディアエンスの廣中直行先生の主導で「薬物・精神・行動の会」が、隔月で行われている（奇しくも両先生は実中研時代の同僚である）。興味ある方は交流の場として活用いただけるとありがたい。

- 1) 精神薬理談話会ニューズレター第1号 (1971)
- 2) 精神薬理談話会ニューズレター第4号 (1975)
- 3) Nutt, DJ, Lingford-Hughes, A, Erritzoe D, Strokes, PRA: The dopamine theory of addiction: 40 years of highs and lows. Nature Review Neuroscience 16: 305-312 (2015)
- 4) Thompson, T, Schuster, CR. Behavioral Pharmacology. Prentice-Hall (1968)

追記：「薬物・精神・行動の会」にご関心のある方は下記までご連絡ください。

nhiro@luna.email.ne.jp

研究者として成長させていただいた日本神経精神薬理学会

新田 淳美

富山大学学術研究部薬学・和漢系 薬物治療学研究室



この度は、日本神経精神薬学会 50 周年を迎え、礎を築いてくださった諸先輩方にお礼を申し上げます。

人生初めての口頭発表を 29 年前の前橋大会にて致しました。学位取得後は、他分野の研究室にて助手をしていたことから、しばらく、本学会へ参加しておりませんでした。2002 年以降は、毎年、総会に参加し、発表し、さらには、2006 年には、合同学会の事務局長を担当し、「実験が好き！ 研究が好き！」の気持ちだけで、研究者として、歩み出した私に、発表や交流の場としての学会を運営するために、大きな工夫や苦勞をされている方がいらっしゃることを勉強しました。

2009 年に、富山大学に異動してからは、AsCNP に学生を連れての参加をするようになりました。これは、自分がそれまでにしてもらったように、自分の学生にも世界の方と触れあわせたいとの気持ちでした。ソウルで開催された AsCNP2011 に参加した時に、思いがけず、私の研究室への初代配属生が賞をいただき、新米教授として、本当に嬉しかったです（右写真）。



2014 年にバンクーバーで開催された CINP の時に、現国立精神・神経医療研究センターの橋本亮太先生と Japan Night の企画をし、学会を動かすために多くの方が尽力されていること、海外の研究者との交流の重要性についても勉強しました。

2014 年秋に理事を拝命し、学会を運営する側として、参画させていただけることになりました。特に、国際学術委員として、広島大学・山脇成人先生が設立され、現在は東京都医学総合研・池田和隆先生が President をなさっている AsCNP の事務局長を担当し、日本神経精神薬理学会や AsCNP が、世界的にも貴重な立ち位置にあり、それを維持するために、歴代の理事長や学会長が尽力されていることを実感しました。また、日本神経精神薬理学会で要職を務めてられる方の大きな後押しで、2018 年からは、CINP の council も拝命し、本学術領域でのアジアの研究者のパワーが益々大きくなっていることを肌で感じました。国際化は、海外の方との共同研究の実施、人材の交流も、もちろん重要ですが、それらに加えて、それぞれの文化や考え方を理解し、相手を尊重することが、最も、

大切であることを改めて、認識しました。世界中に研究者の知人がいることは、多様な考え方を持つことが出来、研究の発展に大切だと思いました。このように国際学会で運営側からの景色を拝見できているのも、日本神経精神薬理学会からのバックアップをいただいているからと本学会には感謝しかありません。



2014年に理事を拝命した折に、日本神経精神薬理学会の歴史で初めての女性の理事であるとのことで、翌年度の東京での総会では、女性ばかりでのシンポジウムをオーガナイズしました。次期理事長の東北大学・大隅典子先生、理研CBSの黒田公美先生、テキサス大学のGenevieve Konopka先生と楽しいシンポジウムの時間を過ごしました。(上写真・中央は座長で、私の恩師の鍋島俊隆先生です)。この時は、女性研究者の方々にお声かけをしてトークをしていただきましたが、内容にも統一性があり、とても良いシンポジウムでした。2019年の福岡での合同学会でもシンポジウムのオーガナイザーをし、男女を意識せずに、ご活躍中の方に声をかけたところ、女性ばかりになりました。たった5年間で、色々なことが動いていることを実感しました。私より少し上の世代の先生方がダイバシティーを研究者社会にも浸透させ、今では、科学の世界には、性差も国境もない自由な環境が整備されてきています。存在するのは違いであり、相手のことを思いやりながら行動することは研究者に限ることではないと思います。

このように、本学会の50年間の歴史の中で、30年間会員をさせていただき、「実験が好き！ 研究が好き！自分のトークを皆に聞いてもらいたい！ 論文が公表されたら、嬉しい！」から、学会の環境を作る側も経験させていただき、その中で、ご一緒させていただいた先生方と共同研究も数多くしてきています。

臨床と基礎の研究を両輪として、私のような者にも、多くの景色を見させてもらい、貴重な経験をし、成長させていただきました本学会が、益々、発展していくことを願っております。

最後になりますが、今年2020年は、新型コロナウイルスのパンデミックで、stay homeはじめ、多くの予期せぬことが起こりました。本学会の研究領域にオーバーラップする疾患に罹患する方が私の身近でも増えていました。永年、神経精神薬理の研究をしている者として、無力を感じました。患者さんを救うための研究に、今後、より一層、精進して参る所存です。そして、本学会の研究領域に貢献できる、成果を残せるようにと決意を新たにしております。

CINP シンポジウムの採択の要綱、開催の打診

油井 邦雄

藤田医科大学医学部教授

(非常勤、陣泌尿器外科学学講座、TSC ボード)



1. CINP シンポジウムの採択歴

神経精神薬理学会にとって、world congress である CINP は重要な国際学会として2年毎の開催に際して、多くの広報をホームページに掲載し、また、かなりの臨床、基礎の研究者が参加している。CINP の公式シンポジウムの採択は欧米に比べて日本からは決して多くないが、私は1994年のXIX Washington大会に佐藤光源先生(東北大)の採択シンポジウムに入れてもらってから、その後は自分で提案書を作成して5回(メルボルン、グラスゴー、パリ、ミュンヘン、ストックホルム)、CINP シンポジウムに採択された。2008年のMunichの大会までは覚せい剤精神病の自然再燃の機序の知見とそれに関連する欧米の研究者3-4名を加えた企画であり、2012年のStockholmの大会ではASDの知見、および私がASDの研鑽のために留学したInstitute of Psychiatryで私の世話役であったChristine Ecker(現、Goethe-Universität Frankfurt am Main, Professor)の画像知見も加えてシンポジウムを行った。世界の研究者に伍して知見を発表することは重要であろう。私の記憶では複数回、採択された方々は山脇成人先生(広島大)、加藤忠史先生(理研、現順天堂大医学部)、吉川武男先生(理研)、住吉太幹先生(富山大、現神経精神医療研究センター)、加藤進昌先生(東大、現昭和大医学部)、池田和隆先生(東京医学総合研)などである。これらの顔ぶれは日本の代表的な研究者と言える(私がそれに該当するか確信はありません)。

2. 採択にいたる要綱

審査は大まかに2段階で行われ、書類選考後の最終選考ではExecutive Committeeが世界の地域枠、過去の採択歴、テーマの斬新度を加味して決定している。シンポジウムの採択の要諦の第一は申請者がどこの誰で何を研究しているかということを知られることが重要である。最初に参加したWashington大会のシンポジウムではPresidentのProfessor Juddに苦勞して面談し研究内容を説明して握手した。名前と何をテーマに研究しているかということ、その後もCINPのたびに著名な研究者にアピールした。このようなアピールはCINPに限らず審査事案では必要と考えている。審査するExecutive Committeeのメンバーが年寄りだから彼らの頭で理解できる古い知識に基づく審査という記事を2005年版のCINP審査体験記をネットで見したが、CINPは斬新さを重視している。高齢化しても頭脳や新しい知識や研究テーマには若い時と同じレベルで取り組める。「年寄りだから」という概念的思考は一部の研究者の悪弊と考えられる。したがって、高インパクトのジャーナルの掲載歴ではなく、その

時点での新しい知見が speaker 全員に盛り込まれている企画が採択の第 2 の要件と考えられる。第 3 にはシンポジウム企画の地域的なバランスと内容のまとまりが取れていること、第 4 に過去のシンポジウムの実施の評価が悪くないこと等が考慮されるでしょう。したがって、相当に練った斬新な企画でないと採択されないという印象である。私がせっせと CINP に企画を出した理由は、日本の伝統的な学閥(旧帝大の東大、京大、東北大、九大、北大の 5 大学、阪大は旧帝大に入りません)を優遇する選考ではないこと、上記の要件に合致した斬新な企画は学閥に関係なく採択され、参加費用を支給されることから、熱意をもってせっせと企画を立てて採択された。

3. CINP の開催の打診

2001年に阪大の武田教授の就任5周年記念セレモニーに参加した際、当時CINPの事務局を設置していたScotlandのProfessor Leonardが私と同じ会場にいて、私と日本の研究状況など会話をした。その数か月後にProf. Leonardからメールがあり、数年先のCINPをアジアで開催するので、開催について私と協議したいからカイロの国際会議の際に会いたいということであった。さすがにCINP世界大会開催は財政的対応が難しいので、阪大の武田教授に話を振った。とりあえず、阪大の准教授の工藤先生とAmsterdamのECNPで開催について協議することにして、開催費用の億円単位の予算を算定をした。後で考えると、Prof. Leonardは私を指名したのに阪大に振ったことが、開催要請の断りと解釈したようで、以後Prof. Leonardとの接点は切れた。Prof. Leonardは香港大の教授もしていたので、その意中のProfessor Tangに話を持って行き、香港の財閥の全面的支援を得て、2010年Hong Kong大会の開催に繋がった。当時、私が財力を動かせる立場であったら、日本のJSNPの状況は相当違ったと考えるが、惜しむらくは脆弱基盤の私にはCINPの主宰は無理であった。

4. ポストの事

大学のポストなどのチャンスは20代後半-50歳代に東北大呼吸器内科と消化器内科、東大医科研から誘いがあり、30歳後半には国立教育大の准教授として自治医大から派遣されたが、その前に京大、医科歯科大からオファーがあった。その後の教授選でも複数のチャンスがあったが、私の志向性のせいか、目下のやりたいことに熱中していて見送った。後になって「損な志向性」と妻に責め立てられている。どのポストに就いたかは退官後の主要教授の動静をみていば、人生にとって意義は少ないと考えている、

5. 今後のJSNPに臨むことが以下の事項である。

- 1) 日本の優れたリーダーは一度決めたことは苦心惨憺しでも実行している。このような強靭さを本学会のリーダーも持ってほしい。慣例で予定の理事を理事長にするのではなく、公明に理事会か評議員会の無記名投票で決めてほしい。
- 2) 斬新な演題や研究の支援をすること。
- 3) プログラム構成は学会長と本学会の「祭事選考委員会」で決めること。

わたくしの精神神経薬理学の軌跡

吉村 玲児

産業医科大学医学部精神医学



わたくしは幸運にも精神科医局在籍中に同時に薬理学にも
研究員として出入りさせてもらえました。そこでは、カル
バマゼピンのイオンチャネルへの影響、さまざまな抗精神
病薬のノルアドレナリントランスポーターやチロシン水酸化酵素への影響を検討しました。
その結果を、日本神経精神薬理学会の年会で何度も発表させてもらいました。その後は抹消
中の代謝物質動態研究などの臨床研究を行い、今は脳画像と抹消代謝物質や免疫系物質と
の関連を調べる研究を引き続き大学院生と一緒に継続しています。最近の先生は Wet Lab
研究を好まない傾向があるようです。Wet Lab 研究は手間と時間がかかり、緻密な操作を一
人で黙々と続ける忍耐力が要求されます。そしてほとんどが思うような結果が得られませ
ん。結果がでないので論文も全く書けない時期もあります。しかし、わたくしはそのような
時間が全く無駄であったとは決して思いません。わたくしは、Wet Lab の時期に体力的にも
精神的にも鍛えられました。実験を継続するには知力はもちろんですが体力も必要です。細
胞培養や動物飼育などの作業は体力勝負です。夜遅くまで時間がかかるし、休日もそのため
に出てくる必要もあります。ノーベル賞をもらうような研究は別でしょうが、精神医学研究
は愚鈍で辛抱強い努力家が良い研究者になるのではないのでしょうか。わたくしはそのよう
な場面に何度も遭遇しました。大学で研究が出来る間は、若い先生たちに研究の楽しさと苦
しさの両面を伝えていければと思うと同時に、自分自身もまた骨太な研究テーマに取り組
みたいと考えています。